

平尾浩一郎氏 城南織物(株)代表取締役

1914年創業の城南織物(株)の3代目・平尾浩一郎氏が今回の「タオルびと」である。祖父の亀太郎氏が1906年に阿部会社で工務係として入社し、その後独立して城南織物工場を立ち上げたのが同社の歴史の始まりである。最初は、綿ネルと広幅綿織物を製造していたが、1973年にタオル製造に特化し、売上を伸ばしていった。

時代の流れに対応できず姿を消していった老舗の綿織物メーカーとは違い、変化によって時勢を掴んできた。平尾氏には城南織物の歴史と四国タオル工業組合（現・今治タオル工業組合）理事長時代の活動を中心に話をうかがう。



平尾浩一郎氏



ひらお・こういちろう ☆ 1951年12月、今治市鳥生生まれ。今治市立立花小学校、愛光学園中学・高等学校をへて、埼玉大学理工学部物理学科に入学。その後、長男の代わりに実家を継ぐことになり、大阪のタオル専門問屋での修行をへて、1978年に城南織物(株)に入社。1985年に専務取締役となり、1993年より代表取締役に就任して3代目を継承。2009年5月から2012年4月まで四国タオル工業組合（現・今治タオル工業組合）の理事長を務め、JAPANブランド育成支援事業での成功を受けて、さらなる「今治ブランド」の知名度アップに貢献した。

1. 初代・亀太郎と「城南織物」

創業時は綿ネル製造からスタート

最初に、城南織物(株)の歴史について表1を参照しながらみていく。

表1 城南織物(株)の沿革

年次	内容
1914	平尾亀太郎氏と正岡七重氏の共同出資によって「城南織物工場」創業
1916	亀太郎氏の単独経営となる
1942	工場および織機を国へ抛出し、いったん廃業
1948	平尾正秋氏が2代目社長に就任し、城南織物(株)に改組
1953	樹之本工場を新設
1964	高下工場（今治市北高下町）を新設
1973	本社工場を閉鎖し、綿織物の製造を廃止 タオル製造に業務を集中させる
1985	東工場（今治市東鳥生町）を新設
1989	樹之本工場を閉鎖
1993	平尾浩一郎氏が3代目社長に就任

出典：「平尾亀太郎『回顧録』」1964年2月；城南織物(株)HP；平尾浩一郎氏提供資料より作成。

平尾浩一郎氏が3代目を務める城南織物(株)は、平尾氏の祖父にあたる亀太郎氏が、正岡七重氏と共同出資して1914年4月に「城南織物工場」を創業し、綿ネル製造を始めたのが嚆矢である。約1カ年にわたる準備期間をへて、織物工場は蒼社川から100mほど離れた水田を埋め立てて建設された。工場内には力織機30台と部分整経機1台が設置され、工場の隣には事務所、倉庫、釜屋、総入場、食堂、便所が設けられた。織工数は51人に上り、創業当初から比較的規模の大きい織物工場だったことが窺える（神立春樹、葛西大和〔1977〕122～124頁）。

1カ年の準備期間に費やした初期投資（固定資本）の金額は、「大正5年9月20日調損益計算書」によると、1万3,525円10銭（企業物価指数をもとに概算すると当時の1円は現在の1,000円以上の価値がある）となっており、そのうちのおよそ6,000円を亀太郎氏が出資した。6,000円というかなりの大金は、父親から財産として分与された水田6反歩を担保にして借り入れた資金も含まれていたようである（神立春樹、葛西大和 [1977] 137頁）。

翌年の1915年になると、正岡氏が亀太郎氏にすべての権利を譲渡したため、正式には1916年に亀太郎氏の個人経営となった。その後、織機の増設、倒産した織物工場の織機引受などによって設備を拡大し、1918年には織機台数が84台を数えた。城南織物工場では、この頃より綿ネルから広幅綿織物への製造に移行し、国内から海外へと新たに販路を開拓した。そして、1927年には別の織物工場を買収し、織機20台、経巻機1台、緯巻機1台、電動機1台がさらに加わり、戦前において大規模工場に成長した（神立春樹、葛西大和 [1977] 127頁）。


海外輸出では、輸出用のロゴマークとして「ゾウ」印が考案され、とくに中国や中近東方面に広幅綿織物を輸出した。当時、インド産綿花・綿糸を使って織物を製造していたことから、亀太郎氏はインドで人気のある「象」をモチーフに選び、石崎陽三氏に頼んでロゴマークを作成してもらった。石崎氏は以前「タオルびと」でも少し触れたが、コンテックス（株）会長の近藤寛司氏の母親・多美枝氏の実弟にあたる（「タオルびと」2016年9月号を参照）。



輸出用ロゴマークの「ゾウ」印

初代・亀太郎、「阿部合名会社に工務係として入社す」

時代を遡り、初代・亀太郎氏はどのような人物だったのかについて、同氏の回顧録からその足跡を辿ってみよう。

表2は亀太郎氏の略歴である。亀太郎氏は、1880年に父・平尾幾治の3男として誕生した。平尾家は、3町歩ほどの田畑を所有する地主であった。8歳で富田尋常小学校に入学し、その後河南高等小学校に入った。河南高等小学校は、1890年に富田村、清水村、立花村、桜井村、下朝倉村が共同で創設した高等小学校で、矢内原忠雄  も同校の出身である。


亀太郎氏は、河南高等小学校を卒業後、約5年間、農業の手伝いをしながら勉学に励んだ。近くの私塾や神社の神主などから漢学や珠算（珠算）、算術、読書、日本外交史などの手ほどきを受け、熱心に学んだ。

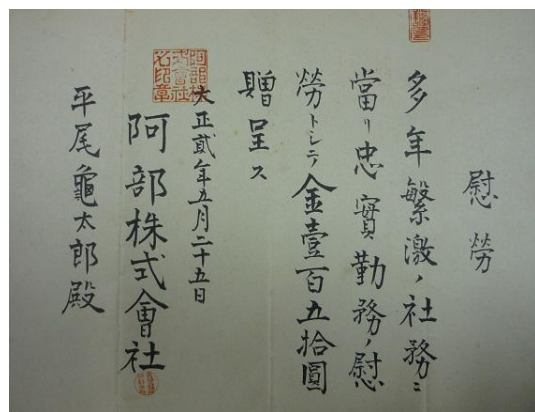
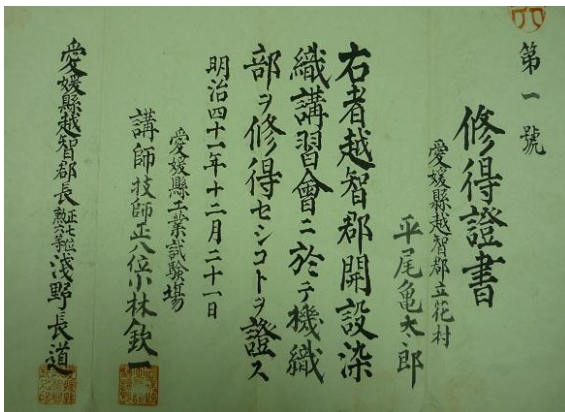
表2 平尾亀太郎略歴

年次	内容
1880	農業を営む父・幾治の3男末っ子として誕生
1888	8歳で富田尋常小学校に入学
1895	15歳で河南高等小学校を卒業 その後、約5年間を私塾などに通いながら勉学
1899	19歳で桜井の永井藤吉漆器商に入り、山口県大島郡に数ヶ月間行商に出る
1900	20歳の頃、越智郡役所書記小林濤三郎の下で臨時として出仕
1901	愛媛県土木課第2区土木出張所の宮崎長造の紹介にて土木課雇員として勤務
1904	24歳にて結婚
1906	26歳で土木課を退職し、高須直市の斡旋により阿部合同会社（のちの阿部株式会社）に工務係として入社
1910	高須の後任として工務主任に就任
1913	阿部(株)を退社
1914	正岡七重の懇請により合同で城南織物工場を設立


出典：「平尾亀太郎『回顧録』」1964年2月より作成。

19歳のときに桜井の永井藤吉漆器商に入り、山口県大島郡で数

ヶ月行商して回ったが、性に合わないことを悟り退職した。そして、越智郡役所で1年間臨時雇いとして出仕したのち、愛媛県土木課に雇員として勤務した。役所務めを終えた1906年、26歳の亀太郎氏は高須直市  の斡旋により月給10円の雇用契約にて阿部合名会社（のちの阿部株式会社、以下阿部会社）に工務係として入社した。入社後は講習会などに積極的に参加し、職人としての技術を磨いた。その後、高須の退社に伴い高須の後任として工務主任に昇格し、阿部会社のために懸命に働いた。その甲斐あって、1913年には会社から感謝状が贈られている。

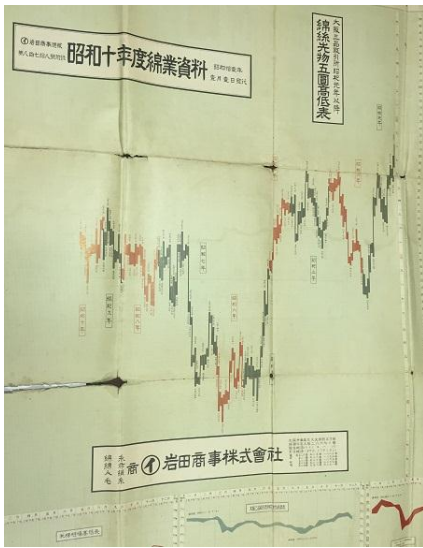


講習会での修了証（左）と阿部会社から亀太郎氏に贈られた感謝状（右）

しかし、1913年に元阿部会社支配人の正岡七重氏の懇請を受けて正岡氏と合同で新しい織物工場設立を計画する運びとなり、阿部会社退社後の1914年に綿ネル業で成功していた実業家の岡田恒太  の世話で城南織物工場を設立した。1916年には岡田の支援もあり、単独で経営を継承し、綿ネルおよび広幅綿織物を主力に業績を伸ばしていった。

第二次世界大戦中は工場とすべての織機を国のために抛出し、織物業をいったん廃業した。織機は武器の材料に使われ、工場は艦上爆撃機「彗星」の翼部分の製造所となった。しかし、この対応を巡っては、亀太郎氏と家業を手伝っていた長男の正秋氏の間で一悶着

あったようである。正秋氏は「戦争は一時的なもので平和な時代が訪れたとき、平和産業である織物業はふたたび必要とされるから残しておくべきだ」という意見だったが、亀太郎氏は「自ら稼いだものだからすべて国のために出せば良い」という意見だった。結局、亀太郎氏の主張どおりになったが、城南織物工場は廃業という大きな痛手を被った。（次号につづく）



戦前は紙が貴重だったため、綿花価格の変動が記されたポスターのような大判の紙（左）の裏面（右）に城南織物の取引明細が記録されている。このような工夫も亀太郎氏がおこなった。

